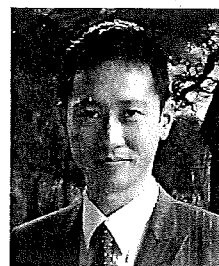


《巻頭言》

鄭南榕と「言論の自由の日」



理事・拓殖大学海外事情研究所准教授 丹羽文生

鄭南榕を知っている日本人は、それほど多くはないだろう。台湾独立運動、あるいは民主化運動を語る上で欠かすことのできない英雄である。

中国共産党との国共内戦に敗れた蒋介石率いる国府（国民政府）軍が中国大陸から逃げ延びてきた台湾では1949年5月から38年もの間、戒厳令が布かれた。もちろん、言論、出版、集会、結社の自由も許されなかった。

鄭南榕が生を享けたのは国府軍による台湾民衆に対する無差別虐殺「二・二八事件」が起こって半年後の1947年9月12日のことである。幼少の頃から才気煥発だったらしい。成功大学で工学を専攻するも、しばらくして輔仁大学、台湾大学に編入し哲学を学んだ鄭南榕は、哲学徒として思索と熟慮を繰り返す中で、国府の圧政に違和感を覚えるようになり、やがて『『中華民国』からの独立』こそが、台湾唯一の活路であるとの結論に達する。

1984年3月、鄭南榕は厳しい言論弾圧にも憶することなく「100%の言論の自由」を謳う『自由時代』という週刊雑誌を創刊し、1986年5月には台北最古の寺院で知られる龍山寺にて「519綠色行動」という大規模集会を開き、戒厳令の解除を求めた。翌年2月、今度は「二二八平和デー促進会」を結成し、語ることにタブーとされた二・二八事件の真相究明と被害者の名誉回復を訴え、4月には公開の場で初めて大勢の群衆を前に「台湾独立」を叫んだ。

1988年12月10日、『自由時代』に「台湾共和国新憲法草案」が掲載される。作者は台湾独立建国聯盟主席で後に台北駐日経済文化代表処代表を務める日本戦略研究フォーラムの許世楷特別顧問であった。

これが引き金となり、年明け、反乱罪に問われた鄭南榕は、高等検察庁から出頭命令を受けるも、これを拒絶し、『自由時代』編集室での籠城を決行する。そして、ついに国府の大軍が包囲する中、4月7日午前9時5分、夫人の葉菊蘭と僅か8歳の一人娘の竹梅を残し焼身自殺を図った。享年41歳だった。この自決が台湾の民主化の発火点になったことは言うまでもない。

2012年8月、編集室の入ったビル前の通りが「自由巷」に改名され、2016年末には、4月7日が「言論の自由の日」に定められた。「台湾魂」と書かれた横断幕が掲げられている編集室は、今でも黒焦げの状態のまま「鄭南榕紀念館」として保存されている。

夫人は後に夫の遺志を継いで政界入りを果たす。陳水扁政権の下で、交通部長や行政院副院長といった数々の要職を歴任した民進党の重鎮で、今は総統府資政（上級顧問）として蔡英文政権のアドバイザー役を務めている。

今年は、ちょうど鄭南榕没後30年で、台湾では間もなく「言論の自由の日」を迎える。同じ自由社会に生きる隣人として、改めて「言論の自由」の尊さを噛み締めながら、鄭南榕の霊に心から敬慕の情と哀悼の誠を捧げたい。